

カ ッ ズ デ ィ ー プ フ ァ イ ル

KZ'D KZ' Deep File

断層の森で
見る夢は

ふじ もと

藤本ひとみ／作

こま がた

駒形／絵



講談社 青い鳥文庫

もくじ

おもな登場人物
おもな登場人物

序章

第1章
星々の村

第2章
奇妙な種子

第3章
生還できるか

第4章
マジック

第5章
時限爆弾

終章

あとがき

トンちゃん
の脳内会話
〜上杉の巻〜

365 364

350

296

241

162

96

27

5

2

わかたけ かずおみ
若武 和臣

中2。探偵チームKZのリーダー。

サッカー選手になるのが夢。

目立つのが大好きで、

テレビや新聞に出たいと

思っている。



とうじょうじんぶつ
おもな登場人物

くろ き たかかず
黒木 貴和

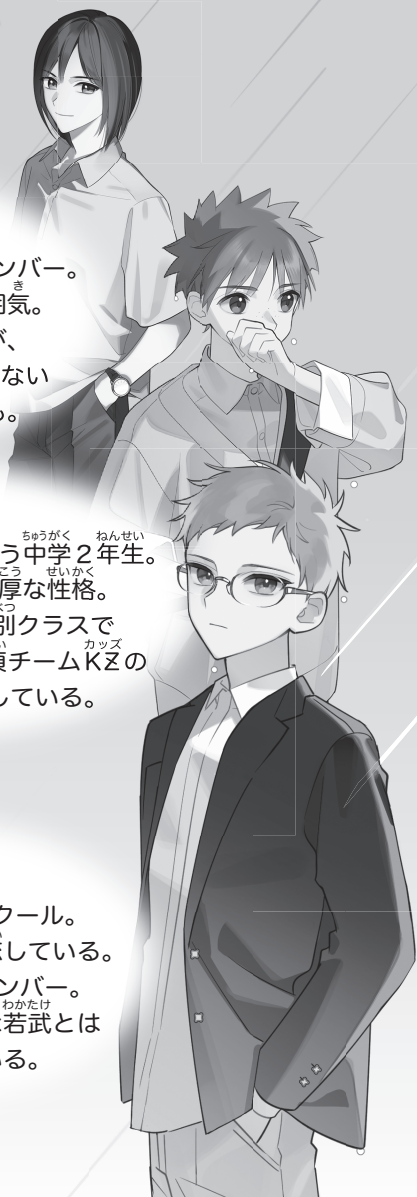
ちゅう たんてい カッズ
中2。探偵チームKZのメンバー。
せ たか おとな ふん い き
背が高く、大人びた雰囲気。
どうさつりよく すく
洞察力に優れているが、
じ ぶん こころ なか ひと み
自分の心の中は人に見せない
いちめん
ミステリアスな一面も。

こ づか かずひこ
小塚 和彦

ちゅうこういっかん しりつだん し こう かよ ちゅうがく ねんせい
中高一貫の私立男子校に通う中学2年生。
どうしょくぶつ くい せい
動植物に詳しくて、温厚な性格。
うえすぎ くろ き じゅく とくべつ
上杉、黒木とは塾の特別クラスで
し あ ゆうじん とも たんてい カッズ
知り合った友人。共に探偵チームKZの
かつどう
メンバーとして活動している。

うえすぎ かずのり
上杉 和典

ちゅう す のうめいせき
中2。頭脳明晰でクール。
すうがく とく い すうじ こい
数学が得意で数字に恋している。
たんてい カッズ
探偵チームKZのメンバー。
ひ にく や かんじょうてき わかたけ
皮肉屋で、感情的な若武とは
しょうとつ
よく衝突している。



序章 じょしょう

「え、それで終わりなの。」

物足りなそうな母に、和彦は頷きながら立ち上がった。

「ごちそう様、行つてきます。」

玄関に向かうと、声が背中を追いかけてくる。

「それっぽっちゃ痩せちゃうわよ。朝はたくさん食べなきゃ。タルトタタンはどう、プリン

は。」

小塚家は、家族全員が太っている。そして誰もそれを気にしない。父はフランスで世間から隔絶された研究所に勤めており、母や同居の叔母たちは専業主婦。

つまり皆が閉じた空間の住人であり、そこは小塚家だけの価値観が支配する世界なのだった。太っている事は優美で貫禄があり、福々しい。

だが和彦は中高一貫の男子校中等部に在学し、一日の多くをその中で過ごす。

そこでは太っている人間は軽侮の対象であり、朝からデザートを食べるのは、マジかと言われ

るほど奇異な事だった。

「そういえば最近あまり食べないのよね。何でかしら。大丈夫かしら。」

「思春期だから、悩みでもあるんじゃないの。」

「でも痩せちゃったら和彦ちゃんらしくないわよ。生まれた時から、丸つ丸だったんですもの。」

「そ、かわいかったわよねえ。」

母や叔母の明るい笑い声を聞きつつ玄関ドアを閉める。

きらびやかな十月の陽射しを浴びて門に向かっていくと、敷石の脇の草叢から鶉のニクスが顔を出した。

「やあおはよう。」

前かがみになって挨拶する。ニクスは不器用に羽ばたき、和彦の頭に飛び乗った。

目を上げると、そこから身を乗り出し、水飲み鳥のように逆さになってこちらを見下ろしている。鳥類独特の、白目の見えない円らな目だった。

「おまえは、いいなあ。」

ニクスは、和彦が夏休みに孵化させた鶉である。

一学期が終わろうとしていた教室で、街で売られている卵は果たして孵るのかという議論が始

まり、和彦が、卵の中には有精卵が交じっている事があるから孵る可能性もあると答えたところ、じゃ証明してみろよと言われたのだった。

スーパーで普通に売っている鶉の卵を四パック買ってきて、合計四十個を温め、二十七日間かけて三羽の鶉を孵化させた。

夏休みが終わり、その三羽を教室に持つていくと、皆が相当なショックを受けたようだった。時間が経てば鳥になる命を、自分たちが日々、何気なく食べている事に罪悪感を感じたらしい。それから二か月、生き延びたのは一羽だけだったが、今では十五センチメートルほどに育ち、庭を自由に歩き回っている。名前は鶉の学名コトウルニクス・ヤポニカから取って、ニクスにした。

「学校に行かなくていいんだもの。」

溜め息をつきながら制服のポケットからラテックスの手袋を出し、両手にはめると頭に上げ、ニクスを掴む。手の中にちょうどすっぽり収まる大きさで、ふわふわした羽根の下に温かな体が感じられた。

手を下ろし、目の前に持つてくる。動いている心臓の音まで聞こえてきた。「僕が、おまえだったらいいのに。」

ニクスは首を傾げる。鶉は決して生きやすい鳥じゃないよと言っているかに見えた。確かに、短命だった。

「でも僕は、おまえじゃないね。わかつてる。だから学校に行くよ。」

昨日、階段を降りようとしていたら、後ろから小突かれた。

「トロトロしてんじやねーよ。」

特別ゆつくりしていたつもりはなかったのだが、和彦は皆よりワテンポ遅れる事が多い。急いでいる生徒には、歯がゆく感じられたのだろう。

「あ、ごめん。」

そう言いながら脇に寄つたとたん、数人が階段を駆け降りていき、焦れたような声が耳に届いた。

「空気を読めよ、デブが。」

刺されたような気がした。言葉自体も痛かったが、ちょうど脇を通りかかった二、三人がクスツと笑い、それで余計に応えたのだった。

その嘲笑によつて先の言葉がしっかりと裏付けられ、自分がまったく価値のない、駄目な人間

のように感じられた。

確かに和彦は太っているし、空気が読めない。

太るまいとしても遺伝的に難しいものがあり、加えて環境も和彦の味方ではなかった。

母と叔母たちの趣味は菓子作りで、毎日ケーキやら焼き菓子やらを山のように作り、和彦が食べないと傷つくのだった。

空気を読むのも、そうしようと思いついていけない。

空気を読むというのは誰かの、あるいは複数の気持ちを察する事なのだろうが、和彦は自分以外の誰かと同じ気持ちを持った事があまりなかった。

そのせいで、察しようとしても想像を絶する。クラスメートが、

「あいつ、マジありえねー。」

という事で合意していても、ありうると感じるし、ありえてもいいとしたか思えないのだった。

中一の時にはそれで皆から浮くのを感じていた。

中二になった今では、皆と違う自分を一人で静かに肯定している。

逆にクラスメートが普通に見過ごしている事、訳もなくいきなりタックルしてきたり、物を壊したり服を破いたりしてなぜか大笑いしたり、トイレに行つても手を洗わなかったりするの、

受け入れがたいと思つていた。

それほど気持ち（きもち）が隔（へだ）たっているのに、空（くう）氣（き）を讀（よ）む事（こと）などどうしてできるだろう。努力（どりょく）してもほとんど不（ふ）可（か）能（のう）だった。呆（ぼう）然（ぜん）とし、階（かい）段（だ）を走（はし）り降（お）りていく彼（かれ）らを見（み）送（おく）る。

「小塚（こづか）、何（なに）やつてんの。」

後（うし）ろからの声（こえ）に振（ふ）り向（む）くと、上（うえ）杉（すぎ）和（かず）典（のり）がやつてきていた。塾（じゅく）仲（なか）間（ま）である。

和（わ）彦（ひこ）は説（せつ）明（めい）しようとしたが、うまく言（こと）葉（ば）にならなかつた。話（は）せば話（は）すだけ、惨（みじ）めになるような氣（き）がする。

「何（なん）でもないんだ。」

上（うえ）杉（すぎ）は、眼（め）鏡（がね）の向（む）こうの目（め）に疑（うたが）わしそ（ひ）かな光（ひかり）をきらめかせた。

しばらく黙（だま）つていて、やがて呟（つぶや）く。

「おまえはさ、おまえのキヤラのままでいいんじゃないやね。」

どうやら見ていたらしい。恥（は）ずかしくて何（なに）も答（こた）えられなかつたものの、叩（たた）き潰（つぶ）されていた自（じ）分（ぶん）の価（か）値（ち）が少（すこ）しだけ頭（あたま）をもたげた氣（き）がした。縮（ちぢ）み上（あ）がつていた胸（むね）にも、再（ふた）び血（ち）が通（かよ）い始（はじ）める。

上（うえ）杉（すぎ）は友（とも）達（だち）だから慰（なぐさ）めてくれただけだ。そう思（おも）いながらも、うれしかった。

「上杉は、いいなあ。」

ラテックスの手袋を片付け、髪を払って自転車に跨りながら和彦は、先ほどニクスを羨んだように今度は上杉を羨望する。きつと自分以外なら何でもいいのだ。

「痩せてるし。」

漕ぎ出しながら再び溜め息をついた。

「数学の首席で尊敬されてるし。」

通勤通学の人混みに交じりこみ、駅から電車に乗って都心まで通う。

満員の車内では通学バッグが人波に持ち去られそうになっても引き寄せられず、体が傾いてい

ても立て直せない。

動けば誰かを押しやる事になるし、痴漢と間違えられる危険もあった。

自分を棒だと思い、まったくの無抵抗で無念無想状態、次の駅でドアが開き、人の出入りが始

まって空間ができたら素早く動く、これが極意だった。

学校は、JRと地下鉄が乗り入れている駅から徒歩三、四分。校門を潜り昇降口を入った所

に、今朝は人垣ができていた。

掲示板には、先日行われた秋の中間考査の成績が発表されている。各教科上位三十名を貼り出

すのが慣例かんれいだった。

採点さいてん済みの考査用紙テストようしは、先週せんしゅう戻もどってきている。そこに学年がくねんとクラス順位じたいが書かかれており、自分じぶんの成績せいせきはもうわかつていた。

屯たふろするのは、他人たにんの成績せいせきを見るためである。いつになくざわついていると思おもいながらその脇わきを通り過すぎようとする、いくつかの声こえが同時どうじに耳みみに入はいってきた。

「超ちやう、仰天ぎやうてん。」

「不動ふどうの数学すうがくトップって言いわれてたのに転落てんらくかあ。」

「ま、上杉うえすぎも人間にんげんだったって事ことで。」

慌あわてて掲示板けいじばんに目めをやる。数学すうがくのトップにある名前なまえは、大椿おおつばきだった。二学期がつきはじ初はじめに転校てんこうしてき

た生徒せいとで、背せが低ひくく肩幅かたはばが狭せまく顔かおが平ひらたいため、山椒魚さんしょうおというニツクネームがついていた。

上杉うえすぎの名前なまえは、その山椒魚さんしょうおの下したにある。見慣みなれない光景こうけいに、和彦かずひこは言葉ことばがなかった。上杉うえすぎは中等部ちゆうぶ入学にゅうがく時から常つねに数学すうがくの首席トップで、小学校しょうがっこうの時ときから数えればその記録きろくはさらに長ながい。

圧倒あつとつてき的な学力がくりきで、数学すうがくに關かんして他人たにんの下したに甘んじた事ことがなかった。上杉うえすぎの連勝れんしょうは誰だれにも止とめられない、次元じげんが違ちがうとすら言いわれていたのだ。

それが突然とつぜんこんな事ことになるとは、誰だれにも予想よそうのできない事態じたいだった。

「数学すうがくっていつも五問もん、各二十点てんだろ。それで上杉うえすぎは大抵たいてい、全問ぜんもんクリアなんだ。計算けいさんミスくらい

は、時にはするみたいだけどき。でも今まで首位しゆいキープだった。」

「じゃ今回は、そのケアレスミスで何点なんてんかマイナスされたんだ。で、山椒魚さんしょうおが完全解答かんぜんかいとうだった。」

「そうだとしたら大椿おおつばき、マジ天才てんさいだぜ。顔かお、相当変そうとうへんだけどき。」

「あれ人間の骨格こつかくじゃない気がする。」

「あいつの顔かおなんか置おいとけ。それより上杉うえすぎって、首位しゆい落ち初はつだろ。きつと相当シヨック受うけてるぜ。」

「別にいいよ、あいつって超生意気ちようなまいきじゃん。」

「そ。転落てんらくしてどんな顔かおしてるのか、じいっと見てやりたい気分きぶん。」

「おまえ、性格悪せいかくわるつ。ぶっちゃ俺おれも、そう思おもってるけど。」

「上杉うえすぎと大椿おおつばきが一緒いっしょになるシーン、見てみたいよな。きつと上杉うえすぎの奴やつ、すげえ目めでにらむぜ。」

「それか、無視むしするかだね。どっちにしる顔かおは引きつってるよ。」

かずひこ
和彦わひこは、昨日きのうの上杉うえすぎを思おもい浮うかべる。

あの時とき、上杉うえすぎは既すでにこれを知しっていたのだ。いつも強気つよきなだけに、屈辱感くつじよくかんは並大抵なみたいていではないはずだった。焦こげるような思おもいを嚙かみしめていたに違ちがいない。

その素振りも見せず普通の顔で、和彦を慰めてくれた。上杉の精神力の強さに敬服しながら考
える。昨日は救われた。今度は自分が何とかしないと。

*

マジか、やつべえ、俺どうすんだ。

返された答案の束の一番上に載っていた順位表に2の数字を見た時の衝撃は、一週間経つても
忘れられない。

全身の血が一気に固まる思いで、同じ言葉を繰り返していた。マジか、やつべえ、俺どうすん
だ。

想定外の現実に関がつかず、検査用紙と解答用紙を何度も見返す。

検査が終了した時点で自己採点しており、首位はキープできるはずだった。

大樫の小柄な体と、左右に離れた目を思う。転校生という事もあり、全国模試でよく見る名前
でもなかったため、まったくのノーマーク、不意打ちに等しかった。

和典より上に位置したのだから、おそらく全問丸ごと模範解答だったのだ。

ちぎしよう、やられた。歩きながら地下道の壁に拳を叩きつける。

ガラスの向こうで宣伝パネルが揺れた。音を聞いた通行人が振り返り、和典は知らない振りです速める。

歯ざしりしたいほど悔しかったが、大樁の非凡な能力に心を打たれもした。

自分にできなかった事をやった大樁に尊敬の気持ちを抱くと同時に、敗北に胸が痛み、恥ずかしさに頬が赤らむ。

頂上から突き落とされ、大きな傷を負った気分だった。

数学で自分より上が存在するというのは生まれて初めてで、その事実には戸惑い、どうすればいいのかわからずにいる。

挫折してこういうのをいうのかもなと、ぼんやり思っていた。

とにかく家に帰ってピアノでも弾こう。この最低な気分ならヴァイオリンより絶対ピアノだ。鍵盤ぶち抜いてやる。

「上杉君。」

地下道から地上に踏み出し、降り注ぐ陽射しに目を細めた時だった。

「これ。」

ロータリーに植えられた並木の間から他校の制服を着た女生徒が一人、踏み出してきた。

「読んでもらえませんか。」

手には手紙があり、少し離れた所から友達らしい二人がこちらを見ている。

「あのさあ。」

面倒くせえ。俺は今、自分の事だけで手いっぱいなんだ。他人と関わってる余裕なんかねーよ。

「これ、何書いてあんの。」

女子は目を伏せる。

「私の気持ち。読んで、もしよかったら付き合ってほしいと思って。」

瞼が震えていた。緊張しているのだろう。

気の毒に思いつつも、ここははっきり言った方がお互いのためだと判断した。

「悪いけど読まない。読んでも付き合う気ないし。」

彼女はとつさに顔を上げる。抗議するかのように頬が強張っていた。

「誰とも付き合わないんですか。それとも、私だからですか。」

アイデンティティの問題なのだろう。

勇気を奮ってコンタクトしてきたその気持ちに敬意を払い、現在の心境を少々吐露する。

「誰ともだよ。俺、今、自分を信じる気持ちゼロだから。こういう自分って、誰にも勧められないからさ。」

歩き出し、すれ違うと、後ろから声がした。

「私、諦めません。」

おい諦めろよ、断られてるだろ。俺以外の方向で頑張れ。ポケットでスマートフォンが鳴り出す。歩きながら取り出すと、小塚からだった。

「あの。」

そう言ったきり黙りこむ。言い淀むのは、小塚の癖のようなものだった。

昨日は随分ダメージを受けていたから、その事だろうか。

「何だ、用なら早く言え。」

耳に、おずおずとした声が流れこむ。

「上杉、気を落とさないでね。上杉の価値は、数学の成績だけじゃないから。」
叩きつけたい思いで通話を切る。きさま、俺のPTSD直撃すんじゃないやねーよ。

和彦は、机にスマートフォンを置く。電話を切られた時の音が、まだ耳の底に残っていた。

怒らせてしまったらしい。だが、どう話せば慰められたのだろう。

遠まわしに言っていたら、上杉の事だから余計に苛立つに決まっている。

何とか力になりたいのに、方法がわからなかった。そういう事はよくあり、先日も塾仲間の若

武から言われた。

「俺、悟つたぜ。サッカーつてさあ、結局テクより体重なんだ。」

若武は、塾のサッカーチームでトップ下を務めている。

背は低い、プレッシャーがかかればかかるほど力が出るタイプでムードメーカーでもあり、

若武がピッチに出て行くと、チームメンバーだけでなく観客席の雰囲気もガラッと変わって勢い

が出る。上杉曰く、

「あいつは、神経が太いというより、ほとんどないんだ。」

抜群のセンスと状況判断力を認められて、FC東京ユースのU-15にスカウトされ、さらに飛

び級でU-18に起用され、リーグ戦に出た。試合前にはいつも通り、

「敵も味方も、俺の華麗な足技に驚くがいい。」

と豪語していたが、それを披露しようとして体格のいい高校生と競り合い、一瞬で吹っ飛ばされた。観戦客の間から大爆笑が起こり、それが若武の自尊心をひどく傷つけたらしい。

結局シュートもアシストもする機会がなく、高校生の間をチョロQのように走り回っただけでその試合は終了、その後は出場メンバーから外された。

「気にしない方がいいよ。でも太りたいんだったら、方法はいつでも教えるけど。」
そう言ったら怒鳴られた。

「おまえみたいになつて、どーすんだ。」

ただ慰めただけだったのだが、気持ちはずたが、通じなかつたらしい。
どこかがズレているのだろうが、それがどこなのかわからなかつた。

「和彦ちゃん、お父様からお電話よ。」

和彦の父はパスツール研究所の研究者で、以前はパリにいた。

今はフランスの北部、ベルギーとの境にあるリールに移っている。

二十世紀初頭までギロチンの処刑人もいたという古都リールは、女王と呼ばれる要塞を持つ北の果ての街である。フランスに併合されたのは十七世紀のことで、フラマン語を話す人々が多

い。

父がそこに異動したばかりの時、訪ねていった和彦は、迎えに行けないから空港でタクシーに乗れと言われ、その通りにしたのだが、途中で突然、高速道路の標識がすべてフラマン語になっており、パリの運転手が読めず、半日ほどあたりを彷徨ったものだつた。

「替わりました、和彦です。」

五秒ほどの沈黙の後、受話器の向こうから父の声がした。

「ネットで見たんだが、南アルプス南部を貫通する新しい高速道路ができるらしいよ。」

和彦は、知らないと答える。このところ中間考査の準備や自己採点、飼育している動植物、昆虫の世話に追われて余裕がなかった。

「それ、もう決定なの。」

南アルプスは正式名称を赤石山脈といい、氷河地形としては日本の南限、国立公園にも指定されている。三千メートル級の峰が多数あり、日本雷鳥を始めとする絶滅危惧種の動植物や、南アルプス限定種、分布限界種が生存していた。

高速道路などを造れば、その生態系に影響が出ないはずはない。しかも地域的には、中央構造線とフォッサマグナが交差している場所なのだ。

道路の安全は確保されるのだろうか。

「すでに掘削が始まっているらしい。今まで通りの生態系を見たいなら、これが最後のチャンスだ。中間調査の後には秋休みだろ。行ってきたらどう。登山道の入り口に当たる赤石村に、大学のゼミの友人がいる。近くに旅館はないから泊めてくれるように話しておこう。星もたくさん見えるよ。環境省の調査で、星の観測に適した場所と認定されたくらいだし。」

和彦は壁のカレンダーに目をやる。秋休みは来週からだった。

「考えとくよ。」

軽い笑いが耳を揺する。

「どうした。浮かない声だけど。」

和彦は、ちよつとした悩みがあると打ち明けた。

「それは、いいことだ。」

え。

「人間は、悩みでもないと思面を考えようとしなない生き物だからね。大いに悩むとよろしい。」

「パパ、今の体重って何キロ。」

あつさりとした答えが返ってきた。

「大したことないよ、まだ百キロ超えてない。」

*

家に帰ると、門に付いているポストから封書の角が出ていた。

引き抜いて和典は、自分宛てと知る。

スイスからのエアメールで、差出人は国際保健機構付属の子供病院寮長だった。

スイスの山奥のその病院には、世界中からやってくる病気の子供のための寮がある。子供たちはそこで学習しながら治療を受けたり、手術までの時間を過ごしたりするのだった。

和典は中一の時、目の手術のために入院していた。

「フランク・ミランが亡くなりました。」

手紙は、そう始まっていた。

「荒れていて、周囲に迷惑ばかりかけていたフランクでしたが、あなたと出会ってから随分と変わり、最後には皆に慕われ、全員の見送りを受けて天国へと旅立ちました。最後まであなたにつ

いて話していた事を、ここにお伝えいたします。」

フランクは九歳で、自分がもう助からないと知っていた。

「不公平だ。だから皆に悲しい思いをさせてやる。誰も彼も、辛い気持ちになって泣けばいい。

そんなの当然じゃん。俺がいなくなっても、皆生きてるんだから。それだけで充分、幸せだろ。

俺なんか死ぬんだぞ。俺より長く生きてる連中なんて、皆、不幸になればいいんだ。」

和典は、罨を掛けた。

「じゃ、おまえが死んだら、皆、喜ぶだろうな。あいつがいなくなつてよかつたつて言うぜ。お

まえが不幸をまき散らす時間より、おまえがいなくなつて皆が喜んで生きていく時間の方が圧倒

的に長いんだ。それつて、悔しくないか。」

フランクは、いかにも無念そうだった。よし罨に落ちろ、そう思いながら誘いかけた。

「いい方法があるよ。おまえが死んだ後、皆が一生、不幸になる方法だ。誰もが立ち直れず、悲

しみを背負い続けていかなければならない、そんな打撃を与える方法がある。それは、おまえが

皆に優しくする事だ。この世の誰よりもいい人間になつて、仲間を大事にして、皆に尽くす事

だ。そうしたら皆は、おまえを好きになる。おまえを絶対に失いたくないつて誰もが思うだろ

う。そのおまえがこの世からいなくなつたら、皆の心に深い傷ができる。ショックで生きていけ

なくなるかもしれない。この世を憎むようになるかもしれない。おまえを失った悲しみを、誰も一生忘れられない。どうだ？ 皆が不幸になるぜ。わかったら、表向きはいい子になるつて誓えよ。それがこの陰謀のスタートだ。」

嬉々として微笑むフランクを見ながら思つた。

しばらくの間こいつは、天使の顔をした悪魔みたいになるだろう。

だが皆のために尽くすうちに、好かれるだろうし必要とされるに違いない。

それがこいつの心を癒やすだろう。フランクはきつと変わっていく。本人のためにも周りのためにも、それが一番いいはずだ。

「亡くなったのは、よく晴れた夜です。病室の窓を開け、アルプスの空に輝く星を眺めながら言いました。俺も星になるのかな。そしたら皆を照らしてやるからさ。皆も俺を捜して、手を振ってくれよな。」

和典は、その様子を想像する。胸が痛くなるほど清らかだった。

「最後の言葉は、こうでした。和典よくもやりやがったな、でもありがとう。私たちの誰にも、意味が解りませんでした。あなたには、お解りになるのでしょうかね。」

ポケットに手を入れ、スマートフォンを出す。小塚に電話をかけた。

呼び出し音を聞きながら、さつき一方的に切った事を反省する。

慰めようとしてくれたのはわかつていた。ただあまりにも不器用で、その朴訥さに腹が立つたのだった。

「はい。」

電話に出た小塚に謝ろうと思いつながら、そんな自分を意気地なしだと感じる。

反省などしてもいらないかのような強い口調でしか話せなかった。

「おまえさあ、社理得意なんだから当然、星座も守備範囲だよな。星がよく見える場所に行きたいんだ。どこがベストか教えてよ。」

しばらくの間があり、返事が聞こえた。

「南アルプスかな。」

小塚が選んだ地名に、奇遇を感じる。

フランクが最後に見ていたのは、アルプスの星だった。

同じ名前のその場所に行けば、星になったフランクに会えるかもしれないと半ば本気で思う。

星は水素ガスで構成されている星雲の中で生まれ、核融合を起こして光るようになり、その星々の動きは数式で表せる。

そうわかっていたが、その過程のどこかで細かな微粒子のようになったフランクのエネルギーを吸収しているかもしれないと思えた。

「南アルプスの麓に赤石って村があるんだけど、たくさん星が見えるらしいよ。」

それなら、きつと会えるだろう。

「旅館はないって話だから、父の知り合いの家を紹介するよ。泊めてもらえば、どう。」

そう言って小塚は黙りこみ、やがて様子を窺うような声を出した。

「あの、僕も行くかもしれないんだけど。あ、一緒になるのが嫌だったらいいよ、行かないから。」

答えずに電話を切る。小塚の臆病さが癪に障った。やたらに他人に譲るんじゃないかと言いたかったが、言えば萎縮するだけだろう。くつそ面倒な奴だ。

手にしていたスマートフォンメニューに戻り、赤石村への交通手段を検索してからLINEにメッセージを書き込む。

「秋休みの初日、一番早い高速バスで行く。『俺ここアプリ』起動させとくから、それでこつちの位置を確認しろ。最寄りのバス停まで迎えにこいよな。」

第1章 星々の村

1

長野県下伊那郡赤石村は、陸の孤島の趣がある。

JRを使えば、新宿から岡谷まで二時間半、飯田線に乗り換えて二時間四十分、さらにバスで一時間三十分。高速バスを使えば新宿から三時間四十五分、松川インターで路線バスに乗りかえて一時間十五分かかる。

東海道・山陽新幹線なら東京から福岡まで行けるほどの時間を使いながら、なお中部地方を出ていないというのは、何とも奇妙な感じだった。

そんな場所だからこそ、高速道路が期待されているのだろう。そこで生活している人々にとっては切実な問題に違いなかった。

上杉は、秋休みの初日に来るといふ。朝一番の高速バスに乗るとの話だったから、赤石村到着

はお昼近くだろう。

和彦はその前に現地に入り、宿泊先に挨拶をしておこうと考えた。

今の上杉は、手負いの獣のようなものだ。いつになく星の見える場所などを探しているのは、それを癒やすためだろう。

環境を整え、気持ちよく滞在して心の傷を治せるようにしてやりたかった。

秋休みに入る前日の夜、自宅を出る。ベルティングレザーで縁取りをしたマウンテンブルーのキャリアケースにシュラフを入れ、同色のスリングバッグを肩にかけた。

途中、交通機関が動いていない時間はシュラフに包まって過ごし、朝、赤石村に到着する。

赤石村役場前の停留所で降りたのは和彦一人だった。

同じバスに乗っていた数人は大きなリュックとピッケルを持ち、クラッシュヤーハットやレイダーポケットキャップを被った登山者で、そのままバスに揺られていった。登山道の入り口に向かったのだらう。

停留所のすぐそばには、「高速道路絶対反対」と書かれた立て看板が立っている。村の地図が添付されており、赤い点線で建設予定の高速道路が描き込まれていた。

赤石山脈を貫通し、北に曲がって小赤石岳の手前から表赤石沢を流れる小天川の北側に沿って

西に延び、村の東北部から北西部を抜ける計画らしい。

泣いている鹿や、山椒魚らしき魚も描かれていた。自然保護団体が設置したのだろうか。あるいは村の総意なのかもしれないなかった。

排気ガスと共に坂を上っていくバスを見送る。

あたりは田圃と畑と里山、その後方は東西南北どちらを向いても脈々と連なる深い山々だった。紅葉には若干早く、どこもまだ緑に覆われている。赤松や栗、檜、楓、橡、それに紅万作などの木が目立った。

圧倒的に多いのは植林された杉で、日本の里山の典型で、問題も多いだろうと心配になった。

日本は国土の三分の二が森林、その四十%が植林された人工林である。

植えられているのは主に杉だった。近年、安い輸入材に押されて杉の需要は減り、ここ三十年間でその価格は三分の一に下がっている。

森林所有者が蒙った打撃は大きく、杉林の手入れを行う費用を捻出できなくなっているケースも少なくなかった。

放置された杉は太陽の光を遮り、下草が育たなくなる。

これにより鹿など動物の食糧がなくなり、人家近くに出没、農作物を食い荒らすのだった。

鹿の被害は、ここ十年で四倍になっているとの報告もある。負のスパイラルともいえる状態

で、対処するのは難しい事に違いなかった。

北東方向の山の中に、白く四角な煙突を備えたコンクリート造りの建物が僅かに見える。

ズボンのポケットから地図を出し、四方の山の名前と現実を一致させながらその建物が国立大学の研究所である事を確かめた。

ここ自体がすでに山の中なのに、さらに奥地でいったい何の研究をしているのかと思つた瞬間、脇を一台のジープが走り過ぎた。

和彦の体スレスレを通過し、転がり落ちるような猛スピードで坂を下っていく。

助手席の窓からサングラスの男が日焼けした顔を出し、こちらを振り向いて怒鳴った。

「危ねーじゃねーか。気を付けやがれ。」

怒りを含んだ声に驚き、亀のように首を引つこめながら見送る。

車外に積んだ予備タイヤのカバーに「じばつ屋」と書かれているのが見えた。

何だろう。首を傾げながら上杉との会話を思い出し、そのナンバーを記憶する。

「タクシー数って知ってるか。」

上杉は、数字の話が好きだった。

「インド人の数学者ラマヌジャンが発見した数で一七二九のこと。それは友人が乗ってきたタクシーのナンバーだったんだ。その数字を友人から聞いた瞬間、ラマヌジャンは、それが二つの三乗数の和として二通りに表す事ができる最小の数だつて事を発見した。つまり一七二九つてのは、一の三乗十二の三乗九の三乗十の三乗なんだ。数字を聞いてすぐそう答えたんだから天才だよ。三十二年しか生きられなかったけどね。」

もしかして上杉も、あのジープのナンバーから数字の法則を見つけ出すかもしれない。

それは上杉の心を明るくするだろう。もし法則を見つけられずに落ちこんだら、きつと三十二年より長く生きられる証だよと言つてやろう。

和彦は、父から聞いた友人の家を目指して歩き出す。

上り坂になつてゐる道を東に向かつて歩けば十分とかからず着くはずだったのだが、ほぼ倍近くの時間がかかった。

随所で気になるものが目に入り、足を止めていたせいである。

最初に発見したのは、東側の崖にくつきりと浮かび上がる断層だった。このあたりを通つてい

これほど大規模で、かつ外帯と内帯の構造がはつきりとしている断層を見るのは初めてで、心を揺さぶられた。

「すげえ。」

中央構造線は、関東から九州に続く日本最大の断層である。

ジュラ紀から白亜紀にかけてできたもので一部は活断層であり、今後動く可能性があつた。同時にこの村は、フォッサマグナの上にも位置している。

大きな地震が起る危険度は、かなり高いかもしれない。

そこに高速道路を通して、いったい大丈夫なのだろうか。

坂を上り、川を見下ろす街道に出る。県道との表示板が立っていた。ここもまた坂道で、道の両側に並木が作られている。

枝の感じから枝垂れ桜かと思つたが、ルーペでよく見ると花桃だつた。

バラ科サクラ属の落葉樹で、開花は桜より少し早い。江戸時代に盛んに改良されて多品種が作られ、一本の木に赤、白、ピンクの花が同時に咲くものもあつた。

和彦は、この道の両側がそれらの花で埋まつている早春を想像する。

道全体がライトアップでもされているかのように華やかだろう。

春^{はる}に來^きてみたいと思^{おも}いながら双^{そう}眼^{がん}鏡^{きよう}を出^だし、並^{なみ}木^きの中^{なか}ほどこに移動^{いどう}して山^{やま}々^{やま}を眺^{なが}めようとした。

そのとたん、

「あぶ^{あぶ}危^{あぶ}ないっ。」

声^{こえ}と共に頭^{あたま}に何^{なに}かが当^あたり、そこからスリングバグの肩^{かた}掛^かけに飛^とび散^ちつた。見^みれば、鳥^{とり}の糞^{ふん}である。顔^{かお}を上げると、木^きから飛^とび立^たつたばかりの小^こ型^{がた}の鳥^{とり}が見^みえた。

色^{いろ}と尾^おの長^{なが}さ、飛^ひ行^{こう}のスタイルからして鶉^{ひたひ}だろう。花^{はな}の蜜^{みつ}を吸^すう習^{しゅう}性^{せい}がある。食^{しょく}事^じ中^{ちゅう}に和^{かず}彦^{ひこ}に近^{ちか}づかれ、やむなく場^ば所^{しょ}を変^かえたらしかつた。

驚^{おどろ}かせて悪^{わる}かつたなと思^{おも}いながらバグから綿^{めん}棒^{ぼう}とビニール袋^{ぶくろ}を出^だし、鳥^{とり}の糞^{ふん}を取^{おさ}める。分^{ぶん}析^{せき}すれば何^{なに}を食^たべているかがわかるし、その内^{ない}容^{よう}によつては生^{せい}息^{そく}地^ち域^{いき}が特^{とく}定^{てい}できる。

この村^{むら}の鳥^{とり}の生^{せい}態^{たい}がはつきりするだろう。

「ああバカ。」

咎^{とが}めるような声^{こえ}と共に、川^{かわ}原^{はら}から坂^{さか}道^{みち}を駆^かけ上^あがつてきた少^{しょう}女^{じょ}が勢^{いきお}いよくそばに寄^よつてきた。その荒^{あら}々^{あら}しさに、和^{かず}彦^{ひこ}は棘^{すく}み上^あがる。

なぜ怒^{おこ}られているのかわからないまま、とにかく謝^{あやま}りたくなつた。

「早^{はや}く拭^ふかないと不^ふ潔^{けつ}でしょうが。取^とれなくなつちやうし。チャッチャとしなよ。」

そんな事で怒られるとは思つてもみなかつた。啞然とする。

「ほら、ハンカチ出して。」

少女は和彦のハンカチを奪い取り、背伸びをして頭上に手を伸ばした。

髪を梳くように何度も拭う。和彦は背を縮め、じつとしていた。

目のすぐ前に、セーラー服の胸元がある。滑らかな喉と鎖骨が見え、あわてて目をつぶった。

「ま、こんなもんかな。バッグは自分でやって。はい、これちゃんと洗うんだよ。」

突き返されたハンカチを受け取る。

「私が危ないって言つた時に、さつきと避ければよかったのに。トロくさいから引かけられんだよ。」

一瞬、胸が痛んだ。自分はどこに行つても、誰からもトロいと言われる運命らしい。たぶん、

それが真実だからだろう。

溜め息をつきながら、取りあえず礼を言おうとして少女に向き直る。

「あの、拭いてくれてありがとう。」

少女は登校途中らしく、片手にスクールバッグを持つていた。

抜けるように色が白く、大きな黒い目をしている。頬はうつすらとピンク、お下げに結んだ髪

が肩に垂れていた。

先ほどの荒々しさは掻き消え、朝の光を受けた緑の葉に照らされているその姿は、桃の花の精のようだった。

和彦は見惚れ、直後に目が合つて、急いで視線を伏せる。

悪い事でもしたような気分で、体中に響き渡る自分の鼓動を聞いていた。少女の軽い笑いが耳をくすぐる。

「その恰好じや山登りはないだろうし、誰のどこに來たの。」

父は、この村に旅館はないと言つていた。

見慣れない顔なら登山者か、知り合いを訪ねる客と決まっているのだろう。

行き先を告げると、少女は急に顔を輝かせ、打ち解けた口調になった。

「和様の知り合いずらか。」

おっ様つて何だろう。戸惑う和彦の前で、少女は僅かに頬を赤らめる。

「和様つて聞くと、つい過剰反応しちゃうなあ。でも私だけじゃないずら。和様のところにや、この村で一番のイケメンがおるでな。和様の一人息子で達樹つていつて、村中の女子の憧れの的だに。達樹さんを見かけたらLINEで情報流すつて事が決まってるくらいずら。」

イケメンの話は、色々な所、様々な局面でよく始まる。学校でも家でも塾でも。人は見た目が重要だと誰もが思っているからだつた。

そんな時、和彦は自分が透明になっていくような気がする。

昔は、へえそうなんだと思つて聞き流すだけだったが、最近は何の関わりも持つ事のできないその類の話から無性に逃げたくなるのだつた。

「道教えながら一緒に行つてやらまいか。」

やらまいかつて、何。

「おいなんやれ。」

おいなんやれつて何だ。

どうしていいのかわからずにいると、少女ははつとしたように声を鋭くした。

「あ、今日は部活あつたら。かな。この道に沿つてけば、左手だに。」

言い捨てて走り出し、こちらを振り返る。

「またな。」

微笑んで走り去るその姿が見えなくなるまで見送つた。また会えるらしいと思いつつ、傷の痛みを噛みしめる。

トロトロしている男は、きつと好かれないうなあ、太つてるしイケメンでもないし。川に沿った坂道をそのまま進み、公園や神社を見ながらさらに上る。

右手前方に雪を被った峰が青い影のように見え始め、地図で確認すると赤石岳だった。日本で氷河の痕跡の見られる最南端の山であり、高山動植物や絶滅危惧種の宝庫でもある。神秘的で美しいその遠景を写真に撮った。

明日行こう。胸を躍らせながら「俺ここアプリ」を起動させ、上杉の位置を確認する。あと三十分前後で松川インターに差しかかるころだった。

メッセージを送ろうかと思ひ、バスの中では寝ているに違いないと考えて止めておく。左手にこんもりとした森が現れ、出入り口に大雄寺との表示が出ていた。

森の中に石段が続いている。地図によれば、安静家はその奥にあった。

先ほどの少女の言葉思い出す。もしかして和様というのは和尚様の事か。

父からは聞いていなかったが、安静家は住職なのかもしれない。

石段を上り切ると三門があり、それを潜った所に背の高い木が植えられていた。

根元は一つで幹が二つに分かれ、上部で絡み合っている。

付いているタグには沙羅双樹とあった。和彦はループを出す。

沙羅さらは釈迦しやくかの聖木せいぼくとされており、いかにも寺らしい植樹しよくじゆだった。だが寒さむさに弱よわく、中部地ちゆうぶ域いきの屋外おくがいで育そだつとは思おもえない。

葉はの様よう子を觀かん察さつし、ツバキ科かの夏椿なつばきと判断はんだんする。沙羅さらの木きとは常緑じようりよくと落葉らくようの違ちがいはあるが似にており、俗稱ぞくしゆとしてそう呼よばれる事こともあると聞きいていた。

「こりや参まいつたな。」

大おおきな声こえがし、振ふり返かえると白しろい鼻緒はなおの雪駄せつたを突つつかけた男性だんせいが砂利じやりを踏ふんで近ちかづいてくるところだった。

「デジャヴか、それとも本ほん当とうに時じ間かんが戻もどつたのか。それにしちや俺おれだけ年食としくつてるのが腑ふに落おちんずら。」

剃そり上あげた禿頭とくとうで、白しろい着流きながしの上うえから墨染すみぞめの羽織はおりを着きている。

「いやあ和人かずとかと思おもつたなあ、ほんとに。」

赤あからんだ顔かおは明あかるく、目めにはうれしそうな輝かがやきがあつた。

年としの頃ころは四だい十じゅう代半ななかば、清廉せいれんで実直じつちくな雰囲ふんいき氣きを纏まとい、背せは高たかく恰幅かつぱくがいい。

「和彦君かずひくんだな。佇たえずまいが和人かずとにそっくりだ。大学だいがくの庭にわで、よくそうやってルーペで植物しよくぶつを見みていたもんだに。」

和彦は、父がどんな学生だったのか聞きたくなる。日頃、自分についてあまりしゃべらないし、そもそも家にいる事自体が少ない。

和彦にとっては学校の担任の方が、父より親しく思えるほどだった。

「私が安静ずら。大学では発酵醸造学を専攻しとったんだが、急に親父が亡くなって、この寺を継ぐ事になってな。好きな道に進めた和人が羨ましいに。いやあ、おいでなんしょ。」

大きな右手を差し出され、握りしめる。羽毛布団のように柔らかな手だった。

「こちらこそお世話になります。友人の上杉は、昼前後の到着になるかと思ひます。」

2

「さ、どうぞ、こつちだに。本堂より塔頭に泊まった方が自由でいいと思つてな、掃除をさせておいたに。」

境内を横切り、右手に本堂や鐘楼、石塔などを見ながら北に進む。かなり広い境内で、松や桜、百日紅がきちんと手入れされていた。

「大きなお寺ですね。」

安静は片手で頭を撫でる。

「創建は鎌倉時代といわれとる。本堂も本尊の薬師如来坐像も、国指定の重文すら。」

こんな田舎に国の重要文化財があるとは意外だった。

和彦は目を見張り、本堂の方を振り返る。

「後で見せてもらってもいいですか。」

安静は苦笑した。

「構わんが、この寺は村じや新しい方だに。いくつかある神社は、ほとんど平安時代すら。」

愕然とする。村中が歴史保存館のようなものだった。

「だが、どこも重文指定は受けとらん。この寺と本尊が初めて指定を受けたんだが、あまりにも制約が多くてなあ。石垣の石一つ補修するにも申請を出して、許可を得なくちゃならん。厄介な上に維持管理は所有者の責任で金がかかるすら。補助金も出るが全額じやないに、ほんで手続きが恐ろしく面倒でなあ敵わん。もちろん時間もかかるに。それを知って皆、呆れちまつてな、指定なんぞいらんわって事になったすら。自分の持ち物なのに自由に手を加えられないとあつちや、不自由過ぎるでな。」

初めて聞く話で興味深かったが、それ以上に、こんな山奥の素朴な村に重文級の建物がいくつ

もあるというのが驚きだった。

「ここにはなぜ、そんな古い建造物が多いんですか。」

安静は、よく聞いてくれたといったような表情になる。

「この南信濃地方、特に伊那谷は元々、皇族の御料や上皇法皇の寺院領、藤原氏領だったに。皇室と深く結びつき、手厚い保護を受けてきた。方言に雅なものが多いのも、そのせい。この土地の名前は、歴史書『吾妻鏡』にも記されとる。」

一見、どこにでもある田舎の村に見えたが、どうも成り立ちが違うらしい。

皇室と関わりがあるとなれば、優れた建造物にも納得がいった。

「後醍醐天皇が足利尊氏と争った時には、その皇子の宗良親王が三十年間にわたってこのあたりを拠点として戦った。本拠地は隣の大鹿村でな、住居のあった場所は御所平と呼ばれとる。都から付き従ってきた人々がこのあたり一帯に住みつき、和歌や能が持ちこまれて独特な文化が形成された。それが江戸時代に到って大鹿歌舞伎として花開いたんじゃないかと、私は思つとる。私見だがな。」

後醍醐天皇と足利尊氏の戦いについては、学校で習った。

だが授業では、その皇子が大鹿村を拠点としたとか、そこで新しい文化が生まれたとかの細部

までは踏み込まない。担任は、それ以上は自分で調べろと指導していた。

和彦は、幕末から明治あたりの活気に満ちた時代に興味があり、当時の地図を見ながら今の街を歩くのが好きだったが、先ほどから話を聞いていて南北朝時代もおもしろいかもしれないという気になった。

後醍醐天皇というのは確か、自分の子供たちを日本の各地に派遣して戦わせ、天下を統一しようとした個性的な天皇だったと記憶している。

「正平七年、西暦では一三三二年、後村上天皇が足利尊氏を討伐せよとの命を発し、宗良親王は征夷大將軍を拝命、この地から出陣したずら。」

今まで知らなかった歴史の細部が一気に頭に雪崩れこんできた。時空を超えた壮大な世界に投げこまれた気分が目をつぶる。

「だが後醍醐天皇や宗良親王の南朝は、正統性を持つていたにも拘わらず、北朝との戦いに敗れたずら。今の天皇は、その北朝の子孫だに。」

安静の言葉には、複雑な重みがあった。都落ちした宗良親王を庇って戦ったこの村の歴史を誇りに思い、かつその敗北に傷ついているのだろう。

「大鹿村には宗良親王の供養塔といわれるものがあるが、残つとるのはそれだけずら。この伊那

谷で没したと考えられ、その王子尹良親王もここで戦死しとるが、歴史は勝者の足跡。敗れた者の記録は尊重されておらんし、この地での薨去説も証明できん、戦死も伝承でしかないずら。三十年間も親王を庇い、養ったのはこの村に城を持つとった豪族香坂氏と、村の人々だったでな。自分たちは食うや食わずでも親王とその一行には不自由をさせなかつたちゆうに、その証も残せず、墓の一つも持てないとは無念な事ずら。」

腕を組み、拳に握った手を着物の袖口に入れながら古い門のそばを通り過ぎる。

敷石の敷かれた道に面して小さな塔頭がいくつか並んでいた。

その北端にある栗棘院と書かれた木戸の前で足を止める。

「ここは、すぐそこが北門で出入りが楽でな、コンビニのある街道にも近いに。自由に使つて構わんずら。飯は、方丈のダイニングで朝六時から、昼は十二時から、夜は六時から食べるに。質問があるかな。」

ないと答えると安静は微笑み、腕組みを解いた。無言で本堂の方に引き返しかける。それを見送っていると、境内を歩いていた中年男性が素早く安静の方に向きを変えた。駆け寄ってくる。後ろには若い男性を従えていた。

「ああ和様、頼む。何とか頼むわ。」

肩で荒い息を繰り返しながら、大きな目で縋るように安静を見つめる。

「和様さえ、反対だと言つてくれりやうまい。案じやあない。それで皆の衆が納得するで。村を一つにするために頼むわ。明日の村議会、俺に味方してくんな。」

安静は困つたような表情になつた。

「それについてはもうお返事してあるがな。熊谷さん、私は自分の立場を利用して村の人々の心を動かすような真似はしたくないもんでな。」

中年男性は気色ばみ、自分に付いてきていた若い男性を振り返つた。

「達樹、おまえの親父の頑固にも呆れるわ。今日はもう事務所に来んでいいから、明日の議会までに説得しといてけつかれ。わかつたな。」

忌々しげに言い捨て、門の方に歩いていく。和彦はあの少女から聞いた話を思い出した。

村一番という達樹の顔をつくづくと見つめる。確かに品があり、古典的で涼しげな顔立ちだつた。今風ではないが、この村ではこういうタイプが好まれるのだろう。

「お父さん、俺はお父さんを説得しようと思つて来た訳じゃありません。熊谷専務は、僕の上司の上司なんで、付いてこいと言われてしかたなく。」

安静は片手を出し、息子の言葉を止めた。

「わかつとる。あの人にはあの人ひとの正義せいぎがあるんだに。」

達樹たつきの端整たんせいな顔かおに、ふつと影かげが落ちる。

「そうでしょうか。」

そう言いつて黙だまりこんだ。あたりに静しずけさが広ひろがり、安静あんじようが溜ため息いきをつく。

「こんな問題もんだいさえ起おこらにや、静しずかない村むらだったになあ。村民そんみん三百人、家族かぞくのように纏まとまつとつたに。」

人口じんこう三百なら、和彦かずひこの在学ざいがくする中部ちゆうぶ部ぶ二年にんの生徒数せいとすうとほぼ同おなじだった。

コミュニティのような纏まとまりを持もった村むらだったのだろう。

「今いまじゃこの土地とちさながら、いくつもの断層だんそうができちまつて。ここに高速道路こうそくどうろを造つくろうなんて言い出した奴やつが、恨うらめしいに。」

高速道路こうそくどうろは、もう掘削くつさくが始はじまっていると聞きいている。

路線バスろせんの道路沿どうろぞいに反対はんたいの立たて看板かんばんが立たっているのを見みたが、まだ揉もめているのだろうか。

「父ちちからは、既すでに掘削くつさくが始はじまっていると聞ききましたが。」

おずおずと口くちを挟はさむと、安静あんじようは領うけいた。

「高速道路こうそくどうろは、このあたりの市しと町まち、村むらを通とおるずら。合意ごういが取とれ、用地ようちの取得しゆとくが終おわつた所ところから

作業を始めとる。作業開始の連絡はその直前、つまり作業を始める前の日の夕方であらう。反対意見を持つ人間が実力で阻止しようとしても間に合わぬ状況を作り、有無を言わせず既成事実を積み上げて、なし崩し的に反対運動を鎮静化させようとして腹だに。連中は日本各地で道路を造ってきたプロ集団すら。住民を屈服させる色んな手を心得とるに。それに対してこっちは、こんなことは生まれて初めてでなあ。形勢は不利だに。」

嘆くような言い方に、達樹が苦笑する。

「お父さんは建設に反対なんですか。それなら専務の言う通りに、議会でその旨、発言すればいいのに。」

安静は、わがりの悪い奴だと言わんばかりに達樹をにらんだ。

「おまえもいずれはこの寺を継ぐようになるんだらうから、よく聞いとくに。住職というのは地元の名士すら。特に高齢者には、和様がそう言うんならと私の意見に靡く人が多いに。だがそれでいいから。高速道路建設を巡って、この村は割れとる。さっきの熊谷専務理事を旗手とする反対派、商店街の小沼会長を中心とする賛成派だ。熊谷専務は、森を守る立場の森林組合の専務理事だし、小沼会長は高速道路が通る事で企業の利益につながると考えている経営者組合のトップだ。その他に、道路が通れば今の家や畑から立ち退かざるを得なくなる人々も出る。約五十軒

との見積もりだに。その人々も、生まれ育つた土地から離れたくない者と、土地を買つてもつと都会に引越したい者に分かれとるでな。利害が様々に対立しているこういう時には、個人個人がよく考え、各自が自分なりの結論を出してそれに沿つて行動せにやならんに。それが民主主義つてもんずら。人に影響を与える立場にある私は、沈黙を守らざるをえん。」

そういうものかと思つた。地元の名士も色々大変らしい。

「ああ達樹、紹介しとくでな。小塚和彦君、私の大学の同期の息子さんに。今日から塔頭に泊まるずら。」

和彦は緊張し、達樹に目を向けた。

父親にはまったく似ていないその雛人形のような顔立ちを見ながら考える、もしかして南北朝時代に京都からやつてきた公家の血筋なのかもしれないと。

「小塚和彦です。お世話になります。」

達樹は、白い頬に笑みを浮かべる。優男の風貌からチラリと凜々しさがのぞき、意外にも精悍な表情になった。

「ゆつくり滞在していくといいよ。僕も、時間が空いたら村を案内するから。今月末には親王祭もあるしね。」

しかも親切。モテる秘訣はこれかもしれない。

「森林組合に戻らなくていいようだから、達樹も一緒にお茶でもどうだ。」

返事も聞かずに、安静は先に立つ。皆でテーブルを囲みたいらしい。

和彦は達樹と顔を見合わせて苦笑し、その後ろに従った。

「森林組合って、森林組合法によって設立された公共団体ですよ。どんな仕事をしているんですか。」

よくある質問だったらしく、達樹はよどみなく答える。

「ひと口で言えば、山の管理かな。森林は材木やチップ、副産物としての木の実や茸などの資源的な面だけじゃなくて、水源の確保や災害防止、野生動植物の保護など多面的な機能を持っている。森林法に基づき、県や市町村と組んでそれらを適正に管理し、森林所有者の利益を確保、未来に繋げていくのが組合の役目だ。材木の流通ネットワークを構築したり、森林所有者への提案をしたり、治山事業計画を立てたり、仕事は多岐に亘ってるよ。」

和彦は、バスを降りて山を見た時に懸念した人工林について、この地方の実態や、対策を聞き取った。

「植林された杉が多いようですが、鹿の被害は増えていませんか。」

達樹は驚いたようにこちらに目を向ける。

「よく知ってるね。鹿害は、今一番の問題だ。正直、頭を痛めてるよ。猟友会と協力して、鹿が生息する森林や餌場、鉄道を横断する場所、川を泳いで渡る地点などを調べて行動マップを作っているところだ。同時に鹿の食糧である山の草を増やすため、森林の手入れも行っている。自伐を導入してね。」

自伐と聞き、じばつ屋と書いてあったあのジープを思い出した。

だが自伐とは何だろう。和彦が考えこんでいると、達樹は素人にはわかりにくいだろうといったような表情になった。

「自伐型林業といって、このところ急に伸びてきた職種なんだ。山の所有者と個人的に契約を結び、森林の手入れを安く請け負うんだよ。個人の山は面積が狭いから小型の機械で間に合い、設備投資が高額にならない。それで森が好きで個人林業家や、都市部で定年退職したUターン族、仲間同士で会社を作ったような若い世代が参入しやすいんだ。このあたりにも自伐の会社がいくつかできている。」

ではあのジープも、その一つなのだろう。

かなり乱暴だったが、細かな事を気にしていられない職業なのかもしれない。

「地方自治体やNPOでも支援しているしね。減るばかりの林業の担い手が、これが増えるんじゃないかとの期待が集まっている。幸いな事に、国産材にシフトする製材工場も増えているしね。外国材は安いが為替の影響が大きく不安定だ。それに対して国内では、植えられている杉の半分以上が樹齢四十五年を超え、利益率のいい時期に差しかかっている。そのために国産材シフトが全国に広がっているんだ。木材自給率は既に三割を超えた。この追い風が自伐型林業にプラスに働いている訳さ。」

感心しながら聞いていると、達樹の手提げで呼び出し音が鳴り始めた。スマートフォンを取り出して電話に出た達樹の表情が、ふつと変わる。

「空いてるのか。じゃ僕が使う。」

伏せた瞼の下で、半眼の目に鋭い光が瞬いた。

突如として燃え立つ火のような、厳しい激しさを感じさせる眼差だった。

「すぐ戻るから。」

電話を切る達樹から、あわてて目を逸らす。何が起こったのだろう。

ただ事ではなさそうだと思いながら、心に焼きついたその眼差を見つめる。

「悪いけど、仕事が入った。」

目を向けると、達樹の顔は出会った時と同じ、涼しげな静けさに覆われていた。

一瞬燃え立つたあの火の余韻は、まったくくない。

「うちの組合には、航空レーザ測量のできるヘリコプターが一台あるんだけど、引つ張りだこでね、なかなか使えない。今なら空いてるって連絡がきたから失礼するよ。」

航空レーザ測量とは、飛行機やヘリコプターに搭載したレーザスキャナから、地上にレーザを照射して地形や標高を調べる測量方法だった。

航空写真などでは判別できない細かな土砂移動や、詳細な地形を立体的にとらえられる。だが取り扱いには、資格が必要だった。

「達樹さんは、航空レーザ測量ができるんですか。すごいな。」

達樹は照れたような笑みを浮かべ、片手を上げて北門の方へと歩いていく。その後ろ姿に、先ほどの眼差が重なった。あれは、何だったのだろう。

不思議に思いながら、栗棘院の木戸の中に踏みこむ。玄関の戸を開けると、上がり框の奥に六畳間、隣に四畳半があり、双方とも庭に面して濡れ縁が付いていた。

孟宗竹と紅葉が植えられた庭は、二坪ほどで井戸がある。部屋には座卓があり、押し入れには夜具が二組入っていた。

トイレは出入り口だけが和風で、戸を開けると中は清潔な感じのする洋式、隣にはシャワーブースが付いている。食事を除いて、ここですべてをすませることができそうだった。上杉もきつと満足してくれるだろう。

一見クールで超然としている上杉だが、決して無頓着ではない。

それどころか意外に繊細で潔癖なのだ。何もかもがきちんと、整然としていないと実に嫌な顔をする。

皆で和彦の家に遊びに来ていても、使ったシャワーやプレパレートが放り出してあるのを見ると、いつの間にか一人でせつせと洗っていた。それで観察中のミジンコを流されてしまった事もある。

思い出して笑いながら本堂の方に足を向ける。境内は静かで人影もなかった。

安静の姿を捜してあちこち歩き回り、本堂の裏手に建つ建物の開放された玄関に雪駄が脱いであるのを見つける。

玄関脇には、檜の一枚板に墨文字で方丈と書かれていた。そつと三和土に入り、中をのぞく。手前に長い座卓が並んでおり、その奥にある座敷から安静が無言で手招きした。

和彦は、達樹が仕事で組合事務所に戻ったと告げながら近づく。

安静あんじやうはいささか残念ざんねんそうだった。

「じゃ二人ふたりで飲むのむしかないな。」

急須きすずを傾かたむけ、焙ほうじ茶ちやを注ついだ茶碗ちやわんをこちらに差し出だす。和彦かずひこは頭あたまを下さげて受け取とった。

香かうばしい香かおりがあたりに広がる。わずかに鉄てつの臭においが交まじつていた。

向むき合あつて黙だまつたまま茶ちやを飲のみつ、気きまづさに変かわりそうな沈黙ちんもくを何なんとかせねばと話題わだいを捜さがす。

「この村むらの北東ほくとうの方向ほうこうにある山やまの中なかに大学だいがくの研究所けんきゅうじよがありますよね。何なんの研究所けんきゅうじよですか。」

安静あんじやうは手てを伸のばし、和彦かずひこの茶碗ちやわんに茶ちやを注つぎ足たす。

「ありや原子力研究所だ。」

意外いがいだった。

「国立大学こくりつだいがくの教育用きやういくようでな、敷地内しきちないに原子炉施設げんしろしせつとトレーサー・加速器施設かそくきしせつ、それに研究棟けんきゅうとうがある。国内こくないに十数基じゆしうきある研究用原子炉けんきゅうようげんしろの一つだそうだ。」

研究用けんきゅうようなら原子炉げんしろとしては最小限さいしうげんのシンプルしんぷるな造りだろう。極低出力ごくていしゆつりきで圧力容器あつりきようきや冷却施設れいきやうしせつもなく、即発臨界そくはつりんかいになることもないし使用済み燃料しやうずみねんりようも発生はつせいしないはずだった。

村むらとしても受け入いれやすかつたのだろう。

「福島第一原発の事故で運転を停止、その後、新規制基準に対応する工事をしとつてな、先月、再起動が認められたつて話だった。そろそろ教授や学生たちがやつてくるすら。達樹はその大学の農学部だったに、当時から知り合いも多くてな。」

安静の頬がわずかに緩む。

「専攻は森林科学だ。その時期、日本の林業の未来は明るくなかつたから、私は内心、反対だったに。口には出さなかつたがな。だが今は光が見えてきている。世の中は変わるものだ実感したよ。目先の利害や、過去の事実に基づいた固定観念に取り憑かれてちやいかな。住職だといふのに、私はどうも大観できんで困る。達樹の方がよっぽど悟つとるすら。もつとも研究室にいるのと違って、現場には現場の問題があるらしい。詳しく話さないんでわからんが。まあ今は村全体が揉めとる時だし、色々あるんだろうな。」

和彦は、達樹の眼差を思い出す。

あれは、やはり何かを抱えている人間の目なのだ。

「ところで君は、南アルプスの動植物を観察したいらしいが、生物に興味があるのか。将来は研究者志望かな。」

自分でも、よくわからなかつた。

今のところは庭や家の中で育てたり飼ったりしている動植物、昆虫の世話や観察、それに会員になつてゐる貝類学会や植物学会の英文会誌を読んで知識を増やす事に熱中している。まだ自分の研究テーマを見つけていなかったし、また逆に、いつそれらに飽きるかもしれない。」「決めていません。というか決められずにいます。でも植物を尊敬しているので、研究者になれなくても、それに関わる仕事につけばいいなと思つていますが。」「

安静は目を丸くする。

「植物を尊敬、か。なぜだ。」

それは植物が自給自足しているからだつた。自分で自分に必要な栄養を作り、それで成長して生きてゐる。だから動かなくてもいいのだつた。

動物には、そんな真似はできない。食糧を捜して歩き回らなければならぬし、象など一日十四時間も食べていなければ自分の体を維持できない。

科学を進歩させITを発達させ、あらゆる動物の上に君臨する人間も、光と二酸化炭素と水だけで食糧を作り、自給自足する事はできない。植物はそれを、自分の一枚の葉の中에서도簡単にやつてゐるのだ。尊敬に値すると思う。

「食糧の確保は、太古から現代まで常に人間の大きな課題であり、戦争の原因にもなつてきまし

た。動物も、食糧のために殺し合いをします。でも植物はそれを回避できている。その点では動物より優れているし、生命体としては理想的な形ではないかと思います。」

安静は笑い出した。

「いやあ君の生きる道は、研究者以外にないずらなあ。」

どこでそう判断されたのかわからない。首を傾げる和彦のポケットで、スマートフォンが鳴った。出してみると上杉からである。安静に断り、立ち上がって座敷を出る。

「今、高速バス降りた。車内暑くつてさ、チノパンびつしより。ベージュだから、焦げ茶の染みになっちまって超カッコ悪。これから路線バスに乗り換える。あのさ、バスの中で思いついたんだけど、茶碗一杯五十五グラムって何の事かわかるか。」

上杉の話は、時々飛ぶ。きつと天才だからだろう。

「茶碗一杯の白飯に含まれてる糖質の量だ。つまり茶碗一杯の飯を食うのは、グラニュー糖五十五グラムを食うのと同じだって事。」

思わずむせそうになる。恐ろしい数字だった。

「グラニュー糖を五十五グラムも食うのは、ちよつと骨だぜ。だが茶碗一杯の飯なら軽いける。これを糖質の罠という。甘さを感じた脳は快樂物質ドーパミンを分泌し、人間は中毒にな

る。だから糖はマイルドドラッグって呼ばれてんだ。だけど小塚、おまえダイエットする気あんの。俺が思うに、おまえには、その気ないんじゃないやね。」

確かにダイエットなど、今まで考えた事もなかった。

「太ってるのを本気で気にしてる奴はさ、必死だから真っ先にそれ考えんだよ。おまえがダイエットに手を出さないのは、真剣に悩んでないから。おまえはもう自分の居場所、自分だけの世界を見つけて、そこでは太っている事がハンディじゃないんだ。それで真剣に悩めないつてのが、おまえの深層心理。だから他人の言う事なんか気にしなくつていいんだよ。」

上杉は、あの事についてまだ考えているのだった。

自分の存在意義が崩壊しそうなほど大きな傷を受けているというのに、氣遣つてくれている。

「ありがと。上杉、本当にありがとう。」

電話の向こうから、舌打ちが聞こえた。

「おまえなあ、デブの方は気にしなくていいけど、空気読めないのだけは何とかしろよ。俺は、真っ向から気持ちを伝え合ったりしたくない男なんだ。そういう空気、いつも出してっだろ。付き合い長いんだから、いい加減に解れ。」

なぜ気持ちを伝え合いたくないのだろう。そこからして不可思議だった。

「空気読めぬーのは、脳の上側頭部が未発達だからだ。睡眠と適度な刺激、つまりコミュニケーションで発達する。頑張れ。あと一時間ちよいで着くから、もう『俺ここアプリ』切るからな。着いたら連絡する。」

上杉のためにできることは何だろう。そう考えながら座敷に戻った。

座卓に向かってゐる安静の前で膝を折り、腰を下ろしながら聞く。

「このあたりで一番、星がきれいに見えるのはどこですか。」

スタンダードな質問ではなかったらしく、安静は思案しながら答えた。

「馬上御所ヶ石あたりかな。宗良親王がよく馬で通ってきて座禅を組んだという大岩がある。」

よし、これから下見に行つて、今夜、上杉を連れていこう。

3

小塚との電話を終わ、ズボンの後ろポケットにスマートフォンを差しこみながら空を仰ぐ。晴天で、真夏のような陽射しだった。

クールエフェクトのアンコンジャケットを着てきてよかったと思ひながら踏み出したとたん、

車の脇から出てきた男たちの一人が肩に突き当たった。

男の胸ポケットから袋が飛び出し、地面に落ちて破れる。そこから中味が零れた。男たちは慌ててしゃがみこみ、茶褐色の砂のようなそれをかき集める。

呆気にとられていると、男の一人に胸元を掴み上げられた。

「このくそガキ、どこに目えつけてやがんだ。」

見るからに柄が悪い。しかも複数だった。こういう時の中学生の保身術は、とにかく素直そうに謝る事。

「ああ、すみません。」

大声を出して周囲の注目を集めるのも、有効な対抗手段だった。

「うっかりしてぶつかってしまつて、本当に申し訳ありません。」

あたりを通りかかる人々やバスの乗客、売店の店員がこちらを見る。

男たちの一人が、和典を掴み上げている男を宥め、他のメンバーがその場を片付け、やがて皆

で車に引き上げていった。暗緑色のジープで、車体に「じばつ屋」とペイントされている。じば

つって何だろ。自×、つまり自分がダメって事か、まさかな。

和典はうつすら笑いながら路線バスの停留所に足を向ける。

高速道路から一般道に降りる道を下つていくと、後ろから車の気配が近づいてきた。道の端に避ける。

車はそのまま通り過ぎるかと思いきや、和典の隣でいきなり止まり、わずかにバックして位置を直した。あのジープだった。

「乗るな。」

ドアが開き、先ほどの男が半身を乗り出す。和典の背後は金網状の高いネットフェンス、その後方は芝生の植えられた崖だった。

ジープはフェンスに車体の後部を擦りつけて斜めに停まっており、対向車線との間には植えこみがあつてどこから見えない。

和典は後退り、フェンスに背中を押しつけた。

やつぱここは何とか逃げるしかないだろうなと思いつつ、こちらに伸びてきた男の手を振り払う。

ジャケットの袖口ボタンがフェンスの網目に入りこんでいたらしく、引きちぎれる音がした。お気に入りのフラワーボタンだったが拾う余裕もなく、開いているドアの下をはいくぐつてその向こうに出る。

直後、運転席から降りてきた大柄な男が目の前に立ち塞がった。

太い腕を伸ばし、和典の首を一気に鷲掴みにする。そのまま吊り上げられ、声が出なかった。

後ろから誰かが背中を掴み、ジャケツトを捲り上げて頭に被せる。首に紐らしきものが巻き付けられ、頭部が包みこまれた。喉に紐が食いこむ。

手際のよさに啞然としつつ、何とか現状を解析した。これ拉致だよな、どうすんだ俺。

「早く乗せる。」

車に連れこまれながらズボンの後ろポケットに指先を突っこみ、スマートフォンの表面を撫でてロックを解除した。

手さぐりで画面の一番端にある「俺ここアプリ」のアイコンにタッチし、起動させる。

これで和典の移動は、小塚のスマートフォンで確認できる。

問題は、小塚がそれに気づくかどうかだった。先ほど、もう切ると言ったばかりだったし、小塚は素直でスローモーション、かつ察しが悪い。祈るような思いで、今だけでいいから違うキャラになつてくれる事を期待した。

和彦は時計を見る。上杉はとつくに赤石村役場前停留所に着いているはずだった。

だが連絡がない。

和彦が停留所から安静の家まで二倍の時間を要したように、上杉もどこかで刺激的な数字を見つけ、途中下車したのかもしれない。安静の名前も家の位置も知らないのだから、一人ではたどり着けない。そのうちにメールをし

てくるだろう。

念のために村役場に電話を入れ、バス停付近に迷っている中学生がいまいかと聞いてみる。役場の係員がわざわざ外まで見に行ってくれたが、上杉はいなかった。

もし見かけたら連絡をくれるように頼んでから大雄寺を後にする。

安静の話では、馬上御所ヶ石というのは赤石岳の登山口に通じる道の途中から林道を北に上がった所で、小天川の急流が走る溪谷に迫り出した大岩のあたり一帯を指す地名だという。

普段はほとんど人の気配のない場所だが、年に一度の親王祭が近づいており、関係者が祭りの

準備じゅんびをしているかもしれないと言いわれた。

和彦かずひこは登山道とざんどうの表示ひょうじに沿そって進すすみ、竹林たけばやしから森もりに分わけ入いる。

木々きぎの間に竹たけんでいる爽さわやかでひっそりとした冷たさが体を包つつんだ。

森もりは静寂せいじやくに満みちている。その静けさの中に、多くの命いのちが奔おほめいていた。

植物しょぶつや動物どうぶつ、昆虫こんちゅうから細菌さいきんまで夥おびたしい生物せいぶつの呼吸こきゅうが風に乗のって流ながれてきて和彦かずひこの鼓膜こまくを揺ゆす

る。森の歌うたのようなその響ひびきに耳みみを傾かたむけていると、自分じぶんが少すこしずつ溶とけ出だして自然いちぜんの一部いちぶにな

り、多くの生命せいめいと一緒いっしょに生いかされているのを感じかんじた。

敬虔けいけんで謙虚けんきよな気持ちになり、感謝かんしゃに満みちて歩あるく。

茂しげった杉林すぎばしの下したに、檜葉苔ひばごけが絹きぬの絨緞じゅうたんのように広ひろがっていた。輝かがやき立つエメラルドグリーンに

目を奪うばわれながら移動いどうしていくと、大量発生たいりょうはっせいしている馬陸やすでの一群いちぐんに出会であう。

あたり一帯いったいを赤茶色あかちやいろに染そめ、しきりに蠢うごめいている様子ようすは大地だいち全体ぜんたいが波打なみうっているかのようだつ

た。その凄まじいエネルギーに感嘆かたんしながら見みつめ入いる。

一昨年おとし、アメリカ科学アカデミー紀要きように掲載けいさいされた富山県立大研究チームの発表はつぷうによれば、外がい

来種らいしゆの馬陸やすでから、医薬品製造時いやくひんせいどうじに触媒しよくばいとする酵素こうそを抽出ちゅうしゆしたとの事ことだった。現在げんざい使つかわれている植しよく

物性酵素ぶつせいこうその五倍ばいの効果こうかを持もつらしい。

日本の馬陸ではどうなのだろう。このところ各地で馬陸が爆発的に増え、駆除に挺摺っている話をよく聞く。

それを酵素採取媒体として活用できれば一石二鳥だった。

森を抜け、街道に出る。とたん、後ろで声が上がった。

「わあ、また会ったなあ。」

振り向くと、今朝出会った少女が三人の仲間と共に道を上つてくるところだった。

「こんな所で会うなんてなあ。ちつとも思わなかったに。」

目に生き生きとした輝きがあり、頬には柔らかな笑みが浮かんでいる。

和彦はうれしくなり、近づいてくるその姿を見つめた。

三人とも赤いリボンを結んだ小枝を胸に抱くように持っている。そのリボンには鈴が付いてお

り、三人の歩みに合わせて澄んだ音を立てていた。

小枝の葉は、十センチメートルほどもありハート形である。その形と大きさからして、紅万作

とわかった。

日本特産の落葉小高木だが、まだ紅葉前で緑色をしている。

それが燃え上がるような緋赤に色付き、少女の顔に照り映える様子を和彦は想像した。息も止

まるほど美しい。

「ほら、あの子だに、さつき話してた鳥の直撃食らったって。」

少女の言葉を受け、仲間たちは肘で突き合つてクスクス笑う。和彦は、一気に現実に引き戻された。傷が痛み、恥ずかしくて居たたまれない。挨拶も早々に歩き出し、直後、後ろから飛び付くように腕を掴まれた。

「ちよつと、なんで逃げるんな。皆、あんたに会つてみたいって言つとつたんだに。」
え。

「バス停で見かけたつて子も多くつて、もう噂な。ちよつとポツチャリ目の感じで、それでもオタクっぽくなくて、包容力ありそうで頼もしいし、かわいいつて。ほら見てみ、喜んどるに。」
呆氣に取られながら振り返ると、少女たちは嬉々として顔を見合わせていた。

「ほんにかわいいずら。優しそうだし。」

「僕つて言うのも、都会つぽくていいな。こつちじや皆、俺だもん。憧れる。」

「記念にツーショット、撮つてもらえるかなあ。」

評価の激変に、和彦はついていけない。からかわれているのではないかと疑いつつ、何と答えたいものか思案に暮れた。

少女は肩越しに三人の仲間に目をやる。

「あの子らは、中島と宮沢と佐々木。私は熊谷桃香。あんたの名前は。」

和彦は、大雄寺で出会った熊谷を思い浮かべた。

「僕は小塚。君って、森林組合の熊谷専務の娘さんなの。」

桃香は、痛いところに触れられたかのような顔付きになる。

「もしかして父に会ったずらか。」

半ば焦り、半ば諦めたような複雑な表情だった。

「きつと誤解してると思うから言っとくけどな、父は、人柄は悪くないずら。ただ顔と口が悪く

て、強引だもんでなあ、やたら嫌われるんだに。けれど、ほんとに優しいに。」

和彦は微笑む。優しいのは、そう言って親を庇う桃香の方だろう。

とても和彦にはできない事だった。照れてしまう。

「さつき大雄寺で会ったよ、達樹さんと一緒だった。」

桃香はとっさに両指を胸の前で合わせ、力をこめて握りしめた。

「達樹さんに会ったんだ。どう、カッコよかったずら。」

否定などしようものなら絞め殺しかねない熱っぽさだった。

和彦は圧倒され、押し流されるように頷く。桃香の小さな唇から溜め息が漏れた。

「いいなあ。私なんか、なかなか会えんもん。チャンスなくつてな。」

街道の下の方で突然、何かを破るような大きな音が響く。

エンジンの回転を上げる音だった。気を取られていると、あつという間に近づいてきて道の曲がり角から暗緑色のジープが現れる。

和彦がここに着いた時に食わした車だった。

「あいつらだ。」

そう言うなり桃香たちは、いつせいに車に背中を向ける。

呆気にとられながら和彦は、砂埃を巻き上げて脇を通りすぎる車体を見送った。

相変わらず荒っぽい運転である。桃香が向き直り、車に向かって思い切り舌を突き出した。仲間

間たちがクスクス笑う。

「それでも今日は、何も言わんとスルーしたなあ。」

「ほんになあ、はれ珍し。」

「どうせ何か悪い事でもして、急いどつたんちやうんか。」

事情がわからず和彦がきよんとしている、桃香が忌々しげな息をついた。

「数年前、登山口近くの安い土地買って、住みこんで自伐やつてる連中。冬は姿を消すけど、また春に来て秋までいる。父の森林組合で雇つてるみたいだけど、態度が悪いつてしよつちゆう怒つてるすら。首にすりやいいのにな。他にどこの自伐やつてるか知らんけど、通学中の私らにチョツカイ出すし、役場前のスナックでもクレーム付けて暴れて、駐在さんが飛んでつたつて話すら。学校からも気を付けるようにつて言われてるしな。」

穏やかな村は、高速道路以外でも揺れてゐるらしかった。

和彦は、車が消えた道の曲がり角になお朦々と立つ砂埃と、車輪に轆かれた道端の草花を見つめる。

数年間もここに通つて自伐に勤しむほど森や自然が好きとは、どうにも思えなかった。

「ところで小塚君、どこ行くんな。」

首を傾げてこちらを見る桃香に、和彦は家の庭で飼つてゐる鶉の顔を重ねる。

あどけなさがよく似ていた。

「馬上御所ヶ石だよ。星がきれいだつて聞いたんで下見に。これから友達がここに来るんだ、見せてやりたくつて。」

桃香は満足そうな笑みを浮かべる。

「私も、そこ行くとこだに。親王祭の飾りつけずら。」

手に持つてゐる小枝を軽く揺すり、森閑とした空氣に鈴の音を響かせた。

「一緒に行かまい。すぐそこだに。」

桃香は先に立ち、街道の片側の山につけられている急な小道を上り始める。

後に続く和彦の後ろに、三人が付いてきた。

古い落ち葉が積み重なり肥料のように発酵している急な坂は泥濘さながらで、ひと足ごとに滑る。

和彦が挺摺っていると、後ろで三人がまたもクスクス笑った。

見られているのを意識して緊張しつつ、尻餅だけはつくまいと必死になる。

上り切った所は三方を落葉松、楠などの高木に囲まれた六十坪ほどの野原だった。

高木の間には山吹、小手毬など低木が生い茂っている。

木々が切れている突き当たりの一角に注連縄が四角に張られ、紙垂が風に戦いでいた。

水の音が聞こえてくる。だが安静の言っていた大岩は、どこにも見当たらなかった。

「あの注連縄の中が、宗良親王が座禅を組んだといわれている場所ずら。」

その小ささに胸を突かれた。

本来なら後醍醐天皇の皇子として都で華やかな暮らしをしていたはずの親王が、こんな寂しい岩の上で一人、座禅を組んでいたのだ。

胸には、どんな思いが行き来していただろう。

「祭りでは、あそこに宝篋印塔が置かれるんな。」

桃香は落ちていた枯れ枝を拾い、地面に絵を描く。

まず大きな四角、その上に小さな四角、さらに角が耳のように斜めに迫り出している四角な屋根を描いた。

その中央部から輪をいくつも重ねるように積み上げて筒形を作り、最上部に球を載せる。

「宝篋印塔は、こういう形。大鹿村にあるのを祭りの前日に借りてくるぞら。」

その形状から考えて宝篋印塔とは、五輪塔とか多宝塔とか呼ばれる供養塔の類らしかった。

「親王の御座所は大鹿村だったけれど、この村にもよく通ってこられてたんで、その御霊をお祭りする事になつとるんだに。」

手にしていた枯れ枝を地面に突き刺し、桃香は注連縄の張られている一角に近寄っていく。そこから横に四、五メートルほど離れた所でこちらを振り返り、手招きした。

近づいていくと水音が次第に大きくなってくる。やがて目の前で野原が途切れた。

左手前方には赤石岳を始めとする南アルプスの山々が連なり、身を乗り出して見れば眼下は断崖絶壁、遙か下方に白い飛沫を飛び散らせて流れる激流が見えた。

くねる蛇のように目紛しく形を変えながら走り下っていく。

「そっちのが大岩。屈んでみ、よく見えるぞ。」

しやがみこみ、桃香の指差す方向に目をやる。

横から見ると、注連縄を張ったあたりの地盤は土ではなく、空中に突き出した一枚の大きな岩だった。

それであのあたりには木々が生えていないのだ。下方の谷に向かって十メートルほど露出しているその大岩に、和彦は驚嘆の息を漏らす。

ジュラ紀から白亜紀にかけての地層が露出しているこの伊那谷ならではの光景だった。

天を仰げば、遮るものは何もない。紺碧の空が果てもなく広がり、その彼方で山々の稜線と交わっていた。

確かにここなら満天の星が見えるだろう。親王は、その星々を見ていたのかもしれない。上杉もきつと、ここで心の傷を癒やせるだろう。そう考えながら、いまだに連絡がないのを訝しく思う。時計を見れば、もう二時を過ぎていた。

スマートフォンを出したが、上杉からは電話もLINEも来ていない。急に不安になった。

「誰か、僕の友達、見かけてないかな。」

桃香たちに上杉の特徴を説明する。誰も姿を見ていなかった。

胸がざわつく。どうしたんだろう。

高速バスを降り、乗り換えるところまではわかっている。その後の動きが不明だった。

「スマホの位置情報、見たらどうな。」

桃香がそう言ったが、上杉は「俺ここアプリ」を切ると言っていた。

「位置情報より詳しいアプリを入れてるんだけどね、今、切れてるはずなんだ。」

桃香は、信じられないといったような顔つきになる。

「あんたなあ、ダメ元でやってみようって気に、何でなんないの。その消極的で後ろ向きな姿勢

勢って、何でずら。」

真っ直ぐにこちらを見すえる眼差が胸に沁みた。

あたふたしながら考える。えつと何でだろう。

「向こうの電源入ってなくても微弱な電波が出てるから、それでわかるって聞いた事あるに。」

和彦は、急いで「俺ここアプリ」を起動させる。

暗い画面に、ゆつくりと上杉の現在地を知らせるマークが浮かび上がった。

「やった、出た。」

歓喜しながら見つめれば、マークはじりじりと移動している。

場所はこの馬上御所ヶ石の近くだった。和彦はあたりを見回す。

どこにいるんだ。なぜ連絡してこないんだろう。アプリを切り、上杉に電話をかける。

5

「おいガキのスマホ鳴ってんぞ。捜して切れ。壊してぶん投げるんだ、早く。」

いくつもの手が体を触り、スマートフォンを掴み出す。

ジープの窓が開いたらしく風が流れこんできた。破壊音が響く。

「まったく近頃のカキは、生意気に色々持つてやがってよ。」

横腹を蹴飛ばされ、激痛に息が詰まった。麻の布袋に押しこまれており、両手両足は拘束具で固定、声も出せない。車の床に転がされたまま、もうかなりの距離を移動していた。

こいつら、何なんだと和典は思う。

妙に手慣れた拉致の仕方だったし、車の中に拘束具を載せてるって、普通じゃねーだろ。

「どうすんだよ、こいつ。」

聞こえてくる声は、男が三人だった。

主に話しているのは二人で、あと一人は時々、相槌を打つ程度にしかしゃべらない。

「何で連れこんだんだ。おまけにあそこから引き返してくるなんて。あのまま行つてりや今頃は中央高速に乗れてたのに。」

「しよーがねーだろ。見られちまったんだからさ。」

和典は思わず首を横に振る。俺は何も見えない、今すぐ釈放しろ。

「一袋分がオシヤカだ。サトジュンに報告しねーとマズい。それに、処分するならこのあたりの方がいい。埋める場所に事欠かねーからな。」

処分って何だよ、埋めるって何なんだ。勝手に決めるな、処分なんかされてたまるか。

「おまえがポケットなんかに入れとくからだ。」

「よく言うよ、貴重品だから身につけとけって言ったの、おまえじゃん。」

「ちよつと休んでこうって言ったのは、おまえだ。ま、残りが無事でよかったぜ。さ、着いた。

大西、ガキ降ろせ。」

肩に担がれて車から出る。急にあたりが明るくなった。

木の戸が開く音がし、新しい声が聞こえる。

「何で戻ってきやがったんだ。大西、おまえが担いでるそいつは何だ。」

大西と呼ばれた男は、ぼそぼそと返事をしながら屋内に入り、和典を床に投げ出す。くっそ人間投げるな、壊れもんだぞ。

「ドジ踏みやがって。」

幾人かが中に入ってくる気配がし、戸が閉まった。

「そいつから足がついたら、どーすんだ。」

沈黙が広がり、やがて溜め息と共に苦り切った声が響く。

「すぐ撤収するぞ。機材は車に運んで、おまえたちはとととと高速バスで帰るんだ。バス停まで送ってやる。こいつの始末は、大西、おまえだ。きちんと埋めたら高速バスに乗れ。いいな。」

今、はつきり埋めるとか言ったよな。俺の事か、冗談だろ。

「証拠、残すなよ。」

男たちは慌ただしく動き回る。大きな物を運び出す気配がした。

和典は何度か蹴り飛ばされ、踏みつけられる。

「芋虫^{いもむし}みてえに寝^ねところがつてんじゃねーよ。邪魔^{じゃま}だろうが。」

好き^すで転^{ころ}がつてるとでも思^{おも}つてんのか、バカ。

「これで全部^{ぜんぶ}だな。じゃ行くぞ。あ、誰^{だれ}か、網^{あみ}を片付^{かたづ}けとけ、急^{いそ}げよ。大西^{おおにし}、おまえビビンじゃねーぜ。しつかり始末^{しまつ}してこい。畑^{はたけ}がある方向^{ほうこう}は避^さけろよ。スコップここに置^おいとくからな。」